

生きてるだけで丸儲け！

1ヶ月だけど2ヶ月の育休

2020年10月末の長女(第二子)誕生に伴い、2021年1月に育休を取りました。11月はそれぞれの親が手伝いに来てくれたため私は普通に出勤し、12月は溜めていた年休を使い3日間しか出勤していません。そのため、実質的に12月と1月の2ヶ月間の育休を取った状況でした。ちなみに、第一子では育休を取っていません。なぜ第二子で育休をとったのか…。

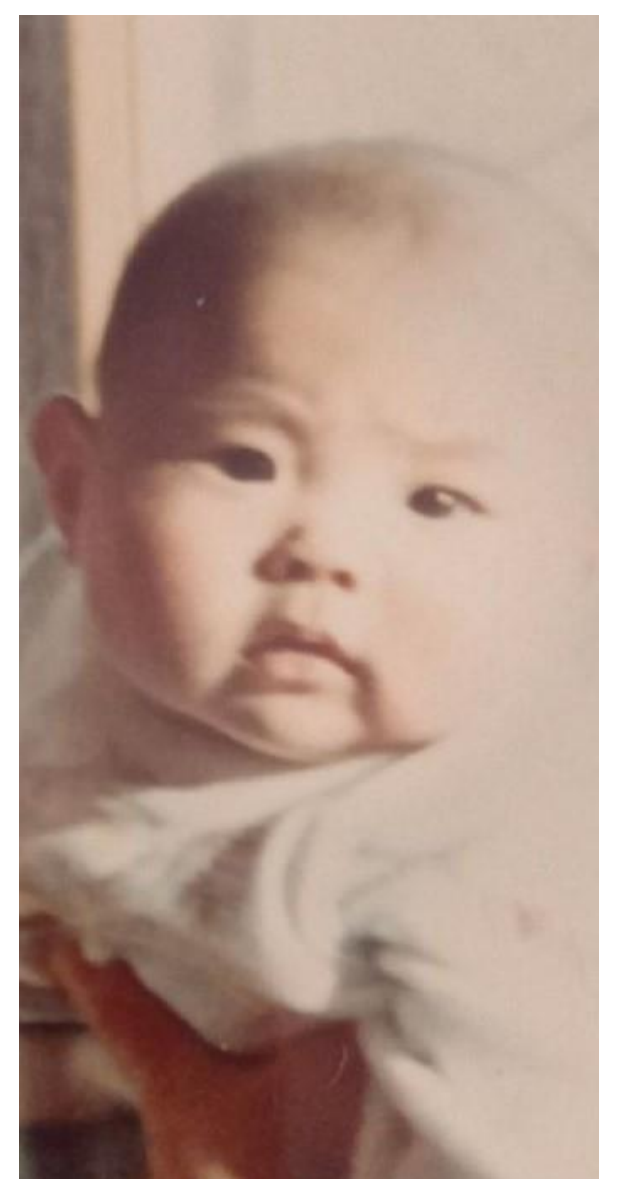
哺乳類の初期死亡率の高さ

私は東北支所でツキノワグマをメインに哺乳類の生態を研究しています。



多くの哺乳類は初期死亡率が高く、例えばクマ類は1歳まで成長できる個体は半数以下と言われています。これは我々ヒトでも同様です。2018年の日本において、新生児(生後～1ヶ月)では1000人中1人、乳児(～1歳)および幼児(～5歳)では2人(新生児の1人を含む)、5～14歳では1人です(ユニセフ 世界子供白書2019)。もっともこれは医療および社会の発展に伴い改善してきました。とはいえ、現代においても500人に1人の幼児がその幼い命を落としています。そして、この統計が取られた2018年生まれの私の長男(第一子)もその“500人のうちの1人”に含まれてしまい、哺乳類の初期死亡率の高さを身をもって知ることとなりました。1歳3ヶ月を過ぎたある日、1日休みを取っていた私と夕方まで遊んでいた彼は、夜、ベッドの上で密かに息を引き取っていました。

第一子では妻は里帰り出産だったため、生後3ヶ月は私とは離ればなれでした。今回、里帰りせずに盛岡での出産となったのは、コロナ禍であることに加え、「またすぐにいなくなってしまうかも」という不安からです。育休をとったのも「突然死を防ぐには、とにかく注視する目を増やすしかない」という理由からです。出来ることなら最長期間で育休を取りたいのですが、突然死どころか両親が飢え死にってしまう可能性があるため、実質的に2ヶ月間の育休取得となりました。

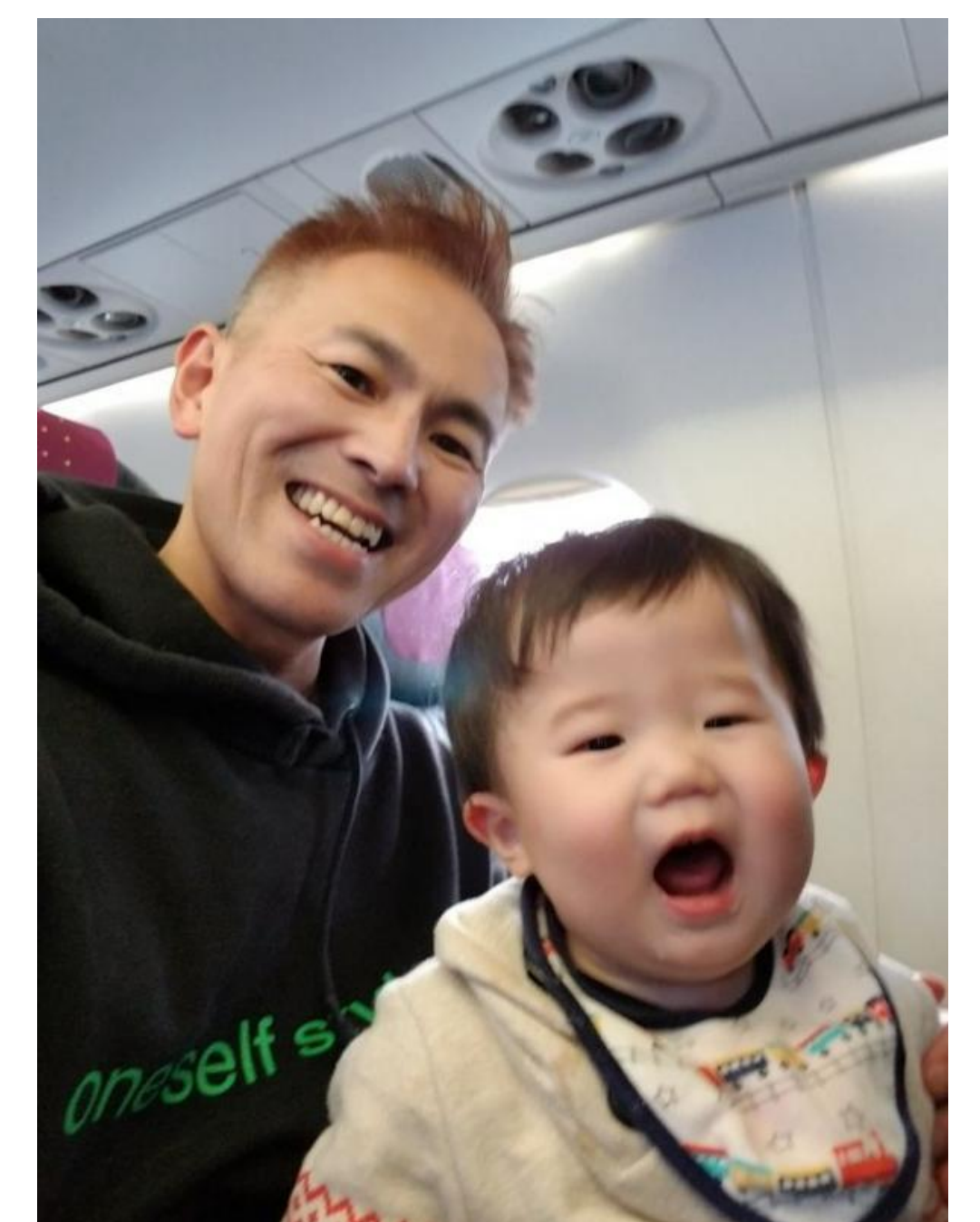


生後4か月の長男、長女、著者

サラリーマンだけど個人事業主？

長男と過ごした1年3ヶ月で「手伝った」なんという感覚は全くありません。むしろ家事&育児の家庭内配分は私の方が分担が大きいことを妻自身が認めています。こんな感じなので、育児を「手伝う」どころか完全に楽しんでいて、大変と思うことも一度もありませんでした。2人で飛行機に乗ったのは5回を数え、ベビーカーに息子を乗せて一緒にステージに上がってライブで演奏したこともありました。

さて、今回の育休。生後直後の数ヶ月は忙しいことはわかっていますが、妻と2人いれば毎日数時間はフリータイムがあると思っていました。しかし、甘かった…「数時間のフリータイムなんて無い」ではなく「数時間のフリータイムはメール対応に消えていった」です。私が休んでいても当然ながら世間は動いており、毎日たくさんのメールが届きます。研究者とはいえ所詮サラリーマン、と思っていましたが、どうやら雇われ個人事業主だったようです。普通に勤務している今の方が寝かしつけた後の1～2時間を自由に使えます。TVでは「育休中に資格を取ろう！」とかCMが流れていますが、育児休暇を舐めんなよ！



長男と2人で飛行機に乗っておでかけ

IoT と AI で24時間観察

野生動物の研究では、暗視カメラを使って観察したり、動物自身の体にGPSや体温計などのデータロガーを取り付けて調査する手法が流行っています。我が家もネットワークカメラや、下着に取り付けて呼吸の状態を監視する装置など様々なIoT機器をアレクサ(スマートスピーカー)に接続し、起きている時も寝ている時も娘を「24時間観察」しています。

子供には「あんなことをさせてたい」「こんな子に育てて欲しい」という夢もあるでしょう。息子の時はそんなことも考えましたが、無事に成人するまで育て上げることが今の私たちにとって最大の目標です。



この白い四角いものがアレクサと連動しており、メリーが止まるとスイッチボタンを自動で押してくれます。これで1時間近く遊んでくれています。



お気に入りのメリーで遊ぶ娘



イクメンコラムでは、育児「三種の神器」についても紹介しています！

東北支所 動物生態遺伝担当 大西 尚樹：記

